

【晉紀三十七】 起屠維作噩，盡上章鬪茂，凡二年。

■東晉、●北魏、▲後燕、続国訳漢文大成 經子史部 第7卷 108p

安皇帝庚義熙五年（己酉，409年）

南燕 〔太樂の備わざるを歎き、晉を掠するの是非〕 春，正月，庚寅（1日）朔，南燕主の**超**は群臣と朝會し，太樂の備わざるを歎き（三年に母を取り戻すために後秦に献じる），晉人を掠して以て伎を補うを議す。領軍將軍の**韓[言卓]**は曰く、

「先帝は舊京（中山、鄴、滑台）の傾覆せるを以て，三齊（齊の地）を**戢翼**（しゅうよく 収め翼を広げる）す。陛下は士を養い民を息め、以て魏の**鼻**（きん）を伺い，先業を恢復せずして，而るに更に南鄰を侵掠して以て仇敵を広げるは，可なる乎！」

超は曰く、

「我が計は已に定まる，卿と與に言わず。」

■辛卯（2日），大赦す。

■ 〔劉毅の人氣と張邵のみ反発〕 庚戌（21日），**劉毅**を以て衛將軍、開府儀同三司と為す。**毅**は才を愛し士を好み，當世の名流は輻湊せざる莫く，獨り揚州の主簿の吳郡の**張邵**は往かず。或は之を問い，**邵**は曰く、（7-109p）

「主公（劉裕は揚州を領しこれをいう）は命世の人傑なり，何ぞ多問を煩はさんや！」

後秦 〔狄伯支を鳩毒で殺す〕 秦王の**興**は其の弟の平北將軍の**冲**、征虜將軍の**狄伯支**等を遣わして騎四萬を帥いて夏王の**勃勃**を撃たしむ。**冲**は嶺北に至り，還りて長安を襲わんと謀り，**伯支**は従わず而して止む。因りて**伯支**を**鳩**（ちん 鳩）（続は酖、毒藥）殺して以て口を滅す。

後秦 **蜀** 〔後秦は蜀の譙縱を冊封〕 秦王の**興**は遣使して**譙縱**を冊拜して大都督、相國、蜀王とし，九錫を加え，製（続は制）を承けて封拜せしめ，悉く王者之儀の如し。

南燕 〔宿豫県を攻めて太樂人員確保、公孫五樓の専制〕 二月，南燕の將の慕容興宗、斛谷提、公孫歸等は騎を帥いて宿豫（県の名、江蘇省徐海道宿遷県の東南、現・宿遷市宿豫区）を寇し，之を拔き，大掠して而して去り，男女二千五百を簡んで太樂に付けて之を教える。**歸**は，**五樓**之兄也。是の時，**五樓**は侍中、尚書と為り、左衛將軍を領さしめ，朝政を専總し，宗親は並んで顯要に居り，王公は内外之を憚らざるは無し。南燕主の**超**は宿豫之功を論じ，**斛谷提**等を封じて並んで郡、縣公と為す。桂林王の**鎮**は諫めて曰く、

「此の數人の者は，民を勤らし兵を頓らし，國の為に怨みを結び，何の功ありて而して封ずるや？」

超は怒り，答えず。尚書都令史（尚書令史を統べる役）の**王儼**は**五樓**に事え（つら）諂い，比歲（毎年）屢々遷り，官は左丞に至る。國人は之が語を為して曰く、

「侯を得んと欲せば，**五樓**に事え（つか）るべし。」

超は又た**公孫歸**等を遣わして濟南を寇して，男女千餘人を俘（とりこ）として而して去る。彭城より以南，民は皆な堡聚して以て自ら固める。■詔して并州刺史の**劉道憐**をして淮陰に鎮し以て之に備えしむ。

西秦 〔乞伏熾磐は自立への動き、乾歸は後秦に逃げる〕 乞伏熾磐は入りて秦の太原公の**懿**に上邽に於いて見え，**彭奚念**（枹罕にいる）は虚に乗りて之を伐つ。熾磐は之を聞き，怒り，**懿**に告げず而して歸り，**奚念**を撃ち，之を破り，遂に枹罕を圍む。乞伏乾歸（後秦に留められる事前卷三年にあり）は秦王の**興**に従いて平涼

に如く。熾磐は枹罕に克ち、人を遣わして乾歸に告げ、乾歸は逃げて苑川に還る。

後秦 **「間隙を狙った劉厥の乱」** ひょうよく馮翊の人の劉厥（興が平涼に行った留守を狙った反乱）は衆數千を聚めて、萬年に聚（続は據）りて亂を作し、秦の太子の泓は鎮軍將軍の彭白狼を遣わして東宮の禁兵を帥いて之を討ち、厥を斬り、其餘黨を赦す。諸將は露布（軍中で勝ちを誇る辞を帛に書いて幟を立てる）、表言して其の首級を廣（数を誇大表現する）げんと請い。泓は許さず、曰く、（胡三省いわく、姚泓は文義に優遊し、儒者から見れば子の道に似る。しかし發乱の才は無し）

「主上は吾に後事を委ね、式^もって寇逆^{とど}を遏むる能わず、當に躬を責めて罪を請い、尚ほ敢て矜誕（自大狂妄）して自ら功と為さん乎！」

秦王の興は平涼より朝那（県名、甘肅省涇原道平涼県の西北、現・平涼市崆峒区）に如き、姚冲之謀（還りて長安を襲うという謀）を聞き、冲は死を賜る。

【劉裕は南燕攻略を計画】

■ **三月**、劉裕は抗表して南燕を伐たんとし、朝議は皆な以て不可と為し、惟だ左僕射の孟昶^{もうちよう}、車騎司馬の謝裕、參軍の臧熹は以て必ず克つと為し、裕に行くを勧める。（7-110p）裕は昶を以て中軍留府の事を監ぜしむ。謝裕は、安之兄の孫也。

■ **「劉裕は王鎮惡の謀略に期待」** 初め、苻氏之敗れる也、王猛之孫の鎮惡は來奔し、以て臨澧（湖南省武陵道安福県、臨澧県、現・常德市臨澧県）令と為す。鎮惡は騎乗長ずるに非ず、關弓（弓を引く）は甚だ弱し、而るに謀略有り、果斷に良く、喜んで軍國の大事を論ず。或は鎮惡を劉裕に薦し、裕は與に語りて、之を説き、因りて留宿す。明くる旦、參佐に謂って曰く、

「吾は將門に將有りと聞く、鎮惡は信^{まこと}に然り。」

即ち以て中軍參軍と為す。

■ 恆山は崩れる。

西秦 **「乞伏氏は再自立準備」** **夏**、**四月**、乞伏乾歸は枹罕に如き、世子の熾磐を留めて之に鎮ぜしめ、其の衆を収めて二萬を得、徙りて度堅山（乞伏司繁の居した所、甘肅省蘭山道金県、現・蘭州市榆中県、）に都する。

【魏主珪の薬害の波紋】

● **「魏主の珪は薬の影響で益々猜疑して人を殺す」** 雷は魏の天安殿東序に震う。魏主の珪は之を惡み、左校に命じて冲（続は衝）車を以て東、西序を攻め、皆な之を毀わさしむ。初め、珪は寒食散（晉で流行る薬）を服し、之久しく、薬は發し、性は多く躁擾し、忿怒は常無く、是に至りて浸^{ようや}く劇す。又た災異は數々見られ、占う者は多く、

「當に急變有りて肘腋を生ずる」

と言う。珪は憂懣して安ぜず、或^{あるい}は數日食せず、或は旦に達して寐ず、平生の成敗得失を追計して、獨語して止まず。群臣左右の皆な信ず可からざるを疑い、百官が事を奏して前に至る毎に、其の舊惡を追記し、輒ち之を殺す。其餘は或は顔色は變動し、或は鼻息は調はず、或は步趨は節を失い、或は言辭は差繆し、皆な以^{おも}て爲らく惡を懷きて心に在り、發して外^{あら}に形わると、往往にして手づから之を撃ちて殺す。死者は皆な天安殿の前に陳ず。朝廷の人は自ら保んぜず、百官は苟しくも免れ、相い督攝するもの莫し。盜賊は公行し、里巷之間、人は為に希少となる。珪は亦た之を知り、曰く、

「朕^{まこと}は故に之を縱^{ゆる}して然ら使め、災年の過ぎるを待ち、當に更に之を清治する耳。」

是の時、群臣は罪を畏れ、多くは敢て親近を求めず、唯だ著作郎の崔浩は恭勤して懈らず、或は終日歸らず。浩は、吏部尚書の宏之子也。宏は未だ嘗て旨に忤わず、亦た諂諛せず、故に宏父子は獨り譴せ被れず。

【夏】【夏の後秦侵略】 夏王の勃勃は騎二萬を帥いて秦を攻め、平涼（甘肅省涇原道靖遠県、現・白銀市靖遠県烏蘭鎮）の雜胡七千餘戸を掠め取り、進みて依力川（甘肅省涇原道固原県、現・寧夏回族自治区固原市原州区）に屯す。

【劉裕の南燕討伐出発】

■ 【劉裕は下邳から琅邪に築城】 己巳（11日）、劉裕は建康を發し、舟師を帥いて淮より泗に入る。五月，下邳（現・江蘇省徐州市邳州市）に至り、船艦、輜重を留め、歩みて進みて琅邪に至る。過ぐる所皆な築城し、兵を留めて之を守らしむ。或は裕に謂って曰く、

「燕人が若し大岨（山東省膠東道臨朐県の東、現・淄博市臨淄区）之險を塞ぎ、或は壁を堅くして野を清めば、大軍は深く入り、唯だ功無きのみにあらず、將に自ら歸る能わず、奈何や？」

裕は曰く、

「吾は之を慮ること熟せり矣。鮮卑は貪婪にして、遠く計るを知らず、進みて虜獲を利とし、退きて禾苗を惜しむ、我が孤軍は遠く入り、持久する能わず、進みて臨朐（山東省膠東道臨朐県、濰坊市臨朐県）に據りて、退きて廣固を守るに過ぎざらんし謂い、必ず險を守りて野を清める能わざらん、敢えて諸君の為に之を保せん。」

【南燕】【南燕の迎撃態勢の議論】 南燕主の超は晉の師有るを聞き、群臣を引いて會議す。(7-111p) 征虜將軍の公孫五樓は曰く、

「呉兵は輕果にして、利は速戰に在り、鋒を爭う可からず。宜しく大岨に據り、入るを得ざら使め、日を曠げて時を延ばし、其の銳氣を沮み、然る後徐に精騎二千を簡び、海に循いて而して南し、其の糧道を絶ち、別に段暉に敕して兗州之衆を帥いて、山に縁いて東に下り（南燕は兗州の梁父に治し、山に近い）、腹背して之を撃つは、此れ上策也。各々守宰に命じて險に依りて自ら固め、其の資儲を校する之外、餘は悉く焚蕩し、禾苗を芟除し、敵に資とする所無から使めれば、彼は僞軍（本国を離れた軍）にして食無し、戰いを求めるも得ず、旬月之間に、以て坐して制する可し、此れは中策也。賊を縦して岨に入り、城を出て逆え戦うは、此れ下策也。」

超は曰く、

「今歳星は齊に居り、天道を以て之を推せば、戦わずして自ら克つ。客主は勢（続は執）いは殊なり、人事を以て之を言え、彼は遠來に疲弊し、勢いは久しく能わず。吾は五州（并州・幽州・徐州・兗州・青州）之地に據り、富庶之民を擁し、鐵騎は萬群、麥禾は野に布し、奈何して苗を芟り民を徙し、鮮（続は先）かに自ら蹙弱せん乎！縦して岨に入ら使め、精騎を以て之を蹂るに如かず、何の克たざるを憂うるや！」

輔國將軍の廣寧王の賀頼盧は苦諫するも從わず、退きて五樓に謂って曰く、

「必ず此くの若くすれば、亡ぶること日無し矣！」

太尉の桂林王の鎮は曰く、

「陛下は必ず騎兵の平地に利なる者を以て、宜しく岨に出て逆え戦い、戦いて而して勝たざれば、猶ほ退きて守る可し、宜しく敵を縦して岨に入らしめ、自ら險固を棄てるべからざる也。」

超は從わず。鎮は出で、韓言卓に謂って曰く、

「主上は既に逆え戦って敵を卻く能わず、又た民を徙して野を清めるを肯ぜず、敵を延べて腹に入れ、

坐して攻圍を待つ、^{はなは}酷だ劉璋（67 卷漢獻帝建安 18 年にあり）に似たり矣。今年國が滅びれば、吾は必ず之に死せん。卿は中華之士にして、復た文身（古来、南の民は文身、すなわち入れ墨す）と為らん矣。」

超は之を聞き、大いに怒り、鎮を収めて獄に下す。乃ち莒、梁父の戎を^{おさ}攝め、城隍を修め、士馬を簡び、以て之を待つ。

■**〔劉裕は勝ちて廣固に至る〕**劉裕は大峴を過ぎるも、燕兵は出でず。裕は手を舉げて天を指さし、喜びて色に^{あら}形わる。左右は曰く、
「公は未だ敵を見ざるに而して先ず喜ぶは、何ぞ也？」

裕は曰く、

「兵は已に險を過ぎ、士は必死之志有り。餘糧（燕は田刈らず）は敵に^{とどま}棲り、人に匱乏之憂無し。虜は已に吾が掌中に入る矣。」

六月、己巳（12 日）、裕は東莞（山東省濟寧道莒県、現・日照市莒県東莞鎮）に至る。超は先ず公孫五樓、賀頼盧及び左將軍の段暉等を遣わし、歩騎五萬を將して臨朐（山東省膠東道臨朐県、現・濰坊市臨朐県）に屯ぜしめ、晉兵の峴に入るを聞き、自ら歩騎四萬を將いて往きて之に就き、五樓をして騎を帥いて進みて巨蔑水（山東省膠東道臨朐県の東を流れて海に入る河、現・濰坊市臨朐県）に據ら使む。前鋒の孟龍符は與に戦いて、之を破り、五樓は退きて走る。裕は車四千乗を以て左右翼と為し、軌を^{なら}方べて^{おもむ}徐ろに進み、燕兵と臨朐の南に於いて戦い、日は^{かたむ}暁くに向い、勝負は猶ほ未だ決せず。參軍の胡籛は裕に言つて曰く、

「燕は兵を悉くして出でて戦う、臨朐城の中は留守にて必ず寡なり、（7-112p）願はくは奇兵を以て間道に從いて其の城を取らん、此れ韓信の趙を破る（9 卷漢高帝三年にあり）所以也。」

裕は籛及び諮議參軍の檀韶、建威將軍の河内の^{しょうび}向彌を遣わして師を潜め燕兵之後に出して、臨朐を攻めしめ、聲言して、

「輕兵は海道より至る矣」

と、向彌は甲を^{かん}擐して先に登り、遂に之に克つ。超は大いに驚き、單騎にして段暉に城南に就く。裕は因りて兵を縦ちて奮撃し、燕衆は大敗し、段暉等の大將十餘人を斬り、超は遁げて廣固に還る。其の玉璽、輦及び豹尾（大駕の屬車 81 乗の最後の 1 乗に豹尾を掛ける）を獲たり。裕は勝ちに乗りて逐に北に廣固に至り、丙子（19 日）、其の大城に克ち、超は衆を収めて入りて小城を保つ。裕は長圍を築きて之を守り、圍高は三丈、塹三重を穿つ。降附を撫納し、賢俊を采拔し、華、夷は大いに悦ぶ。是に於いて齊地の糧儲に因り、悉く江、淮の漕運を停める。

南燕 **〔後秦に救援を求めて尚書令の韓范を遣わす〕**超は尚書郎の張綱を遣わして秦に師を乞い、桂林王の鎮を赦し、以て録尚書、都督中外諸軍事と為し、引見し、之を謝し、且つ計を問う焉。鎮は曰く、

「百姓之心は、一人に^{かか}繫る。今陛下は親しく六師を^{ただ}董し、奔敗して而して還る。群臣の心は離れ、士民の氣は喪う。秦人は自ら内患（赫連勃勃の自立）有りと聞き、恐らくは兵を分けて人を救う暇あらず。散卒の還る者は尚ほ數萬有り、宜しく悉く金帛を出して以て之に餌にすれば、更に一戦して決すべし。若し天命が我を助ければ、必ず能く敵を破らん。若し其の然らざれば、死すも亦た美為るかな、閉門して盡きるを待つに比して、猶ほ^{まさ}愈らず乎！」

司徒の樂浪王の惠は曰く、

「然らず。晉兵は勝ちに乗り、氣勢は百倍し、我は敗軍之卒を以て之に當たる、亦た難からず乎！秦は勃勃と相い持つと雖も、患と為すに足らず。且つ我と中原に分據し、勢いは脣齒の如く、安んぞ來たりて相い救はざらんを得ん！但だ大臣を遣わさざれば則ち重兵を得る能わず、尚書令の韓范は燕、秦の重き所

と為り、宜しく遣わして師を乞うべし。」

超は之に従う。

■秋、七月、劉裕に北青、冀二州刺史を加える。(晉氏南渡後に、南青州冀州を淮南に立てる)

■南燕[慕容超腹心の逃亡] 南燕の尚書の略陽の垣尊(垣氏の子孫は後に南国の邊將と為り功名を著す)及び弟の京兆太守の苗は城を逾えて來たり降り、裕は以て行參軍と為す。尊、苗は皆な超の委任し以て腹心と為す所の者也。

■[裕は樓車から呼びかけ、南燕の領土割讓を拒否] 或は裕に謂って曰く、

「張綱は巧思有り、若し綱を得て攻具を為ら使めば、廣固は必らず拔く可き也。」

會 綱たまたまは長安より還り、太山太守の申宣は之を執り、裕に送る。裕は綱を樓車(望樓のある車)に升らしめ、城を周らして呼ば使めて曰く、

「劉勃勃は大いに秦軍を破る、兵の相い救う無し。」

城中は色を失わざる莫し。江南は兵を發し及び使者を遣わして廣固に至る毎に、裕は輒ち潜かに兵を遣わして夜之を迎う、明くる日、旗を張り鼓を鳴らして而して至り、北方之民は兵を執りて糧を負いて裕に歸す者は、日に以て千數。城を圍むこと益々急にして、張華、封愷は皆な裕の獲る所と為る。超は大岷の以南の地を割きて藩臣と為るを請い、裕は許さず。

後秦[劉裕は後秦の脅しを一蹴] 秦王の興は遣使して裕に謂って曰く、

「慕容氏は相い與に鄰好し、(7-113p)今晉は之を攻めること急なり、秦は已に鐵騎十萬を遣わして洛陽に屯す。晉軍が還らざれば、當に長驅して而して進まん。」

裕は秦の使者を呼びて謂って曰く、

「汝が姚興に語れ。我は燕に克つ之後、兵を息めて三年、當に關、洛を取らん。今は能く自ら送れば、便ち速かに來る可し！」

劉穆之は秦の使い有るを聞き、馳せて入りて裕を見、而るに秦の使者は已に去る。裕は言う所を以て穆之に告げ、穆之は之を尤めて曰く、

「常日は事の大小と無く、必ず預め謀を賜わる、此れ宜しく善く詳かにすべし、云何ぞ遽爾として之に答えんや！此の語は以て敵を威すに足らず、適々以て之を怒らすに足る。若し廣固未だ下らざるに、羌寇が奄至すれば、何を以て之を待つかを審かにせずや？」

裕は笑いて曰く、

「此れは是れ兵機にして、卿の解する所に非ず、故に相い語らざる耳。夫れ兵は神速を貴び、彼れ若審し能く赴き救うならば、必ず我が知られんを畏れ、寧んぞ先ず信命を遣わす容けんや、逆め此の言を設けるや！是れ自ら張大にするの之辭也。晉の師出でざるは、日為ること久し矣。羌(後秦)は(晉が)齊を伐つを見、始(續は殆)めて將に内に懼れる。自ら保つに暇あらず、何の能く人を救わん邪！」

西秦[乞伏乾歸の復位] 乞伏乾歸は復た秦王に即位し、大赦し、改元して更始とし、公卿以下は皆な本の位に復す。(乾歸は公卿將帥を降して僚佐偏裨と為す事 112 卷隆安五年にあり)

●[魏主の慕容氏弾圧] 慕容氏の魏に在る者百餘家は、逃げ去らんと謀り、魏主の珪は盡く之を殺す。

●[魏の拓跋儀の肅清] 初め、魏の太尉の穆崇は衛王の儀と甲を伏して魏主の珪を弑せんと謀り、果たさず。珪は崇、儀之功を惜しみ、秘して而して問わず。珪の疾有り、多く大臣を殺すに及び、儀は自ら疑い

て而して出でて亡^にげ、追いて之を獲る。**八月**、**儀**に死を賜る。(小林恵子は倭国に影響するとす)

■**封融**は**劉裕**に詣りて降る。(前卷2年、406年に魏に奔る、魏が慕容氏を肅清したのが原因)

■**九月**、**劉裕**に太尉を加え、**裕**は固辭する。

後秦 **秦王興は勃勃に敗れる** 秦王の**興**は自ら將いて夏王の**勃勃**を撃ち、貳城(貳県城は杏城の西北、平涼の東南、甘肅省涇原道寧県、現・慶陽市寧県)に至り、安遠將軍の**姚詳**等を遣わして分かちて租運を督さしむ。**勃勃**は虚に乗りて奄至し、**興**は懼れ、輕騎にして**詳**等に就かんと欲す。右僕射の**韋華**は曰く、

「若し**鑾輿**一たび動けば、衆心は駭懼す、必ず戦わずして自ら潰え、**詳**の營も亦た未だ必らず至る可からざる也。」

興は**勃勃**と戦い、秦兵は大敗し、將軍の**姚榆生**は**勃勃**の擒うる所と為る。左將軍の**姚文宗**等は力戦し、**勃勃**は乃ち退き、**興**は長安に還る。**勃勃**も復た秦の敕奇堡、黄石固、我羅城(三城は甘肅省涇原道平涼県にあり、現・平涼市)を攻め、皆な之を抜き、七千餘家を大城に徙し、其の丞相の**右地代**を以て幽州牧を領し以て之に鎮ぜしむ。

後秦 **後秦に使いした韓范はついに劉裕につく** 初め、**興**は衛將軍の**姚強**を遣わして歩騎一萬を帥いて、**韓范**(続は韓範)に隨いて往きて**姚紹**に洛陽に就き、兵を並せて以て南燕を救わしむ。**勃勃**に敗れる所と為るに及び、**強**の兵を追いて長安に還らしむ。**韓范**は歎じて曰く、

「天は燕を滅す矣！」

南燕の尚書の**張俊**は長安より還り、**劉裕**に降り、因りて**裕**を説いて曰く、(7-114p)

「燕人の恃む所の者は、**韓范**は必ず能く秦の師を致さんと謂う也、今**范**を得て以て之を示せば、燕は必ず降らん矣。」

裕は乃ち**范**を表して散騎常侍と為し、且つ書を以て之を招き、長水校尉の**王藩**は**范**に秦に奔るを勧め、**范**は曰く、

「**劉裕**は布衣より起こり、**桓玄**を滅ぼし、晉室を復す。今師を興して燕を伐ち、向う所崩潰す、此れ殆んど天授なり、人力に非ざる也。燕が亡びれば、則ち秦は之が次と為る矣、吾は以て再び辱しむ可からざるなり。」

遂に**裕**に降る。**裕**は**范**を將いて城を循り、城中の人情は離沮す。或は燕主の**超**に**范**の家を誅するを勧め、**超**は**范**の弟の**言卓**が忠を盡くして貳無きを以て、**范**の家を並せて之を赦す。

●■**冬**、**十月**、**段宏**は魏より**裕**に奔る。(前卷3年に魏に奔る)

南燕 **張綱**は**裕**の為に攻具を造り、諸々の奇巧を盡くす。**超**は怒り、**綱**の母を城上に懸けて、之を支解す。

西秦 **西秦の乾歸と太子熾磐** 西秦王の**乾歸**は夫人の**邊氏**を立てて王后と為し、世子の**熾磐**を太子と為し、仍ち**熾磐**に命じて中外諸軍を都督し、尚書事を録せしむ。**屋引破光**を以て河州刺史と為し、枹罕に鎮ぜしむ。南安(続は安南?)の**焦遺**を以て太子の太師、與に軍國の大謀に參ぜしむ。**乾歸**は曰く、

「**焦生**は特に名儒なるのみに非ず、乃ち王佐之才也。」

熾磐に謂って曰く、

「汝は之に事えること當に吾に事える如きなるべし。」

熾磐は**遺**を床下に拜す。**遺**の子の**華**は孝至り、**乾歸**は女を以て之に妻わさんと欲し、辭して曰く、

「凡そ妻を娶る者は、之と共に二親に事えんと欲すれば也。今王姫(周は姫姓なり、故に王女を王姫とす、後世王女

の意味に為る)之貴きを以て、下りて蓬茅之士に嫁するは、誠に其の匹に非ず、臣は其の中饋(部屋の中で饋食を司る、婦人の職分)を闕かんを懼れ、願う所に非ざる也。」

乾歸は曰く、

「卿之行う所は、古人之事なり、孤の女を以て卿に強うるに足らざる。」

乃ち以て尚書民部郎と為す。

【北燕は高雲から馮跋へ】

北燕 **【側近の高雲の殺害】** 北燕王の雲は自ら功德無く而して大位に居るを以て、内に危懼を懷き、常に壯士を畜養して以て腹心爪牙と為す。寵臣の**離班**、**桃仁**は禁衛を專典し、賞賜は巨萬を以て計り、衣食起居は皆な之と同じくし、而して**班**、**仁**の志願は厭く無く、猶ほ怨憾有り。戊辰(13日)、雲は東堂に臨み、**班**、**仁**は劍を懷にし紙(統は帋)を執りて而して入り、啟する所有りと稱す。**班**は劍を抽いて雲を撃ち、雲は几を以て之を扞ぎ、**仁**は旁より雲を撃ち、之を弑す。

北燕 **【馮跋の即位】** 馮跋は洪光門に升りて以て變を觀、帳下督の**張泰**、**李桑**は跋に言つて曰く、

「此の豎の勢いは何の至る所ぞ、公の為に之を斬るを請わん！」

乃ち劍を奮いて而して下り、**桑**は**班**を西門に於いて斬り、**泰**は**仁**を庭中に於いて殺す。衆は跋を推して主と為し、跋は以て其の弟の范陽公の**素弗**に讓るも、**素弗**は可とせず。**跋**(字は文起、長樂信都の人)は乃ち**天王**に昌黎に於いて即位し、大赦し、詔して曰く、

「陳氏は姜に代わりて、齊國を改めず。宜しく即ち國號を燕と曰わん。」(周の呂望は羌姓、初めて齊に封じられる。

戦国時代に齊の大公田和は陳敬仲の後にして羌の後を纂ひてその国を取り、なお齊という)

改元して太平とし、雲に諡して**惠懿皇帝**と曰う。**跋**は母の**張氏**を尊して**太后**と為し、妻の**孫氏**を立てて**王后**と為し、(7-115p)子の**永**を**太子**と為し、范陽公の**素弗**を以て車騎大將軍と為して、尚書事を録さしめ、**孫護**を尚書令と為し、**張興**を左僕射と為し、汲郡公の**弘**を右僕射と為し、廣川公の**萬泥**を幽、平二州牧と為し、上谷公の**乳陳**を並、青二州牧と為す。**素弗**は少きときは豪俠にして放蕩なり、嘗て婚を尚書左丞の**韓業**に請い、**業**は之を拒む。宰輔と為るに及び、**業**を待つこと尤も厚し。好みて舊門を申拔し、謙恭儉約にして、身を以て下を帥い、百僚は之を憚り、論者は其の宰相之度有りと美める。

【魏主珪の殺害事件】

● **【太子の生母を殺すのが魏の伝統】** 魏主の珪は將に齊王の**嗣**を立てて**太子**と為さんとす。魏の故事は、凡を嗣子を立てて、輒ち先ず其の母を殺す、乃ち**嗣**の母の**劉貴人**に死を賜る。**珪**は**嗣**を召して之を諭して曰く、

「**漢武帝**は**鉤弋夫人**を殺す(22卷漢武帝後元元年にあり)は、以て母后の政に預り、外家の亂と為るを防ぐ也。

汝は當に統を繼ぐべし、吾は故に遠く古人に^{したが}跡い、國家長久之計を為す耳。」

嗣は性は孝、哀泣して自ら勝たず。**珪**は之を怒る。**嗣**は舍に還りて、日夜號泣し、**珪**は知りて而して復た之を召く。左右は曰く、

「上は怒ること甚しく、入れば將に測らず、且く之を避けるに如かず、上の怒りの解くを俟ちて而して入るべし。」

嗣は乃ち逃げて外に匿れ、帷だ帳下の代人の**車路頭**(車は拓跋の疏属、後漢の孝文帝に至りて車氏とす)、京兆の**王洛兒**の二人は之に隨う。

● 「珪は賀氏の夫を殺して紹を生ます」 初め、珪は賀蘭部に如き、獻明賀太后之妹の美なるを見、賀太后に言つて、之を納れるを請う。賀太后は曰く、

「可からず。是れ過美なり、必ず不善有らん。且つ已に夫有り、奪う可からざる也。」

珪は密かに人をして其の夫を殺さ令めて而して之を納れ、清河王の紹を生む。紹は凶很無頼にして、好く輕々しく里巷に遊び、行人を劫剥して以て樂しみと為す。珪は之を怒り、嘗て井中に倒懸し、死に垂々として、乃ち之を出す。齊王の嗣は屢々之を誨責し、紹は是に由りて嗣と協せず。

● 「珪は賀夫人を殺さんとして逆に紹に殺される」 戊辰（13日）、珪は賀夫人^{けんせき}を譴責し、囚え、將に之を殺さんとす。日暮に會いて、未だ決せず。夫人は密かに使いして紹に告げて曰く、

「汝は何を以て我を救うか？」

左右は珪の殘忍なるを以て、人人は危懼する。紹の年は十六、夜、帳下及び宦者宮人の數人と通謀し、垣を逾えて宮に入り、天安殿に至る。左右は呼んで曰く、

「賊至る！」

珪は驚きて起き、弓刀を求めるも獲ず、遂に之を弑す。（拓跋珪は年39、魏初代太祖道武帝、代王拓跋什翼犍の孫）

● 「紹に百官従わず」 己巳（14日）、宮門は日中に至るも開かず。紹は詔と稱し、百官を端門（宮門の正南門）の前に集め、北面して立たしむ。紹は門扉の間より百官に謂つて曰く、

「我は叔父有り、亦た兄有り、公卿は誰に従うを欲すや？」

衆は愕然として色を失い、對える有る者莫し。良久しく、南平公の長孫嵩は曰く、

「王に従はん。」

衆は乃ち宮車の晏駕するを知り、而るに其の故を測らず、敢えて聲を出す莫く、唯だ陰平公の烈は大哭して而して去る。烈は、儀（魏の燕に勝つに功有り、この年八月誅殺）之弟也。是に於いて朝野は恟恟として、人は異志を懷く。肥如侯の賀護は烽を安陽城（直隸省口北道蔚県、現・張家口市蔚県）の北に擧げ、賀蘭部の人々は皆な之に赴き、其餘の諸部も亦た各々屯聚す。紹は人情の安ぜざるを聞き、(7-116p)大いに布帛を出して王已下に賜わり、崔宏は獨り受けず。

● 「紹の殺害」 齊王の嗣は變を聞き、乃ち外より還り、晝は伏せて山中に匿れ、夜は王洛兒の家に宿す。洛兒の鄰人の李道は潜かに嗣に奉給し、民間は頗る之を知りて、喜んで而して相い告ぐ。紹は之を聞き、道を収め、之を斬る。紹は人を募りて嗣を求め訪ね、之を殺さんと欲す。獵郎（拓跋氏が置く獵を尚す）の叔孫俊は宗室の疏屬の拓跋磨渾（元城侯の屈の子）と與に自ら雲う、

「嗣の在る所を知る」

と、紹は帳下の二人をして之と偕な往か使む。俊、磨渾は出るを得、即ち帳下を執えて嗣に詣りて、之を斬る。俊は、建之子也。王洛兒は嗣の為に平城に往來し、大臣に通問す、夜、安遠將軍の安同等に告げる。衆は之を聞き、翕然として響應し、争いて出でて奉迎す。嗣は城西に至り、衛士は紹を執りて之を送る。嗣は紹及び其の母の賀氏を殺し、並びて紹の帳下及び宦官宮人の内應を為す者十餘人を誅す。其の先に乘輿を犯す者は、群臣は之を嚙食す。

● 「嗣の皇帝即位」 壬申（17日）、嗣（字は木末、道武皇帝の長子）は皇帝に即位し、大赦し、改元して永興とす。劉貴人を追尊して宣穆皇后と曰い、公卿の先に罷めて第に歸り朝政に預からざる者は、悉く召して之を用いる。長孫嵩に詔して北新侯の安同、山陽侯の奚（のち魏の孝文・獻帝の第三兄の後を以て達奚氏と為し、尋いで又改めて奚氏と為す）斤、白馬侯の崔宏、元城侯の拓跋屈等八人と與に止車門（臣子は宮門に至りて車から降りて入る）の右に坐し、共に朝政を聽かしめ、時の人は之を八公と謂う。屈は、磨渾之父也。嗣は尚書の燕鳳が什翼

健(代王)を逮^{およ}び事えたる(左長史)を以て都坐大官(尚書都省、尚書の長官)の封懿等と與に入りて講論に侍し、出でて政事を議せ使む。王洛兒、車路頭を以て散騎常侍と為し、叔孫俊を衛將軍と為し、拓跋磨渾を尚書と為し、皆な爵郡、縣公を賜わる。嗣は舊臣に問う、

「先帝に親信する所と為る者は誰と為すか」

と。王洛兒は李先(西燕の慕容永の參謀で、中山に移り、魏に歸す)と言う。嗣は召して先に問う、

「卿は何の才、何の功を以て先帝の知る所と為るか？」

對えて曰く、

「臣は才あらず功無し、但だ忠直を以て先帝の知る所と為る耳。」

詔して先を以て安東將軍と為し、常に内に宿さしめ、以て顧問に備える。朱提王の悅は、虔(拓跋虔)之子也、罪あり、自ら疑いて懼る。閏十一月、丁亥(3日、閏月でなく十一月?)、悅は匕首を懷にして入りて侍し、將に亂を作さんとす。叔孫俊は其の舉止に異有るを覺り、手を引いて之を掣し、懷中を索し、匕首を得、遂に之を殺す。

南燕十二月、乙巳(元嘉曆一月?22日)、太白は虛、危(28宿)を犯す。南燕の靈台の令の張光は南燕主の超に出でて降るを勸め、超は手ずから之を殺す。

●柔然は魏を侵す。

安皇帝庚義熙六年(庚戌、410年)

南燕「超は城上で晉軍の盛んなるを見て泣く」春、正月、甲寅(元嘉曆一月閏1日)朔、南燕主の超は天門(廣固の内城の南門)に登り、群臣を城上に朝せしむ。乙卯(2日)、(7-117p)超は寵姬の魏夫人と登城し、晉兵之盛んなるを見、手を握りて對して泣く。韓[言卓]は諫めて曰く、

「陛下は堙厄之運に遭い、正に當に努力して自ら(心)を強くし以て士民之志を壯んにすべし、而るに更に兒女子の泣きを為す邪！」

超は目を拭いて之に謝す。尚書令の董銑は超の降るを勸め、超は怒り、之を囚える。

●魏の長孫嵩は兵を將いて柔然を伐つ。

●「魏は緩和策で郡縣の豪右を平らぐ」魏主の嗣は郡縣の豪右が多く民の患えと為るを以て、悉く優詔を以て之を征(續は徴)す。民は土を戀い内に徙るを樂まず、長吏は逼りて之を遣り、是に於いて無賴の少年は逃亡して相い聚まり、所在は寇盜群起す。嗣は八公を引いて之を議して曰く、

「朕は民の為に蠹(木食い虫)を除かんと欲し、而るに守宰は綏撫する能わず、之をして紛亂せしむ。今犯す者は既に衆く、盡く誅す可からず、吾は大赦して以て之を安んぜんと欲するが、何如や？」

元城侯の屈は曰く、

「民は逃亡して盜を為す、罪にせず而して之を赦せば、是れ上^た為る者は反って下に求める也、其の首惡を誅し、其餘黨を赦すに如かず。」

崔宏は曰く、

「聖王之民を御するは、務めは之を安んずるに在り而して已^{のみ}、之と勝負を較べるにあらざる也。夫れ赦すは正に非ずと雖も、以て權を行ふ可し。屈は先ず誅して後に赦さんと欲す。要^{かなら}ず兩つとも(先ず誅を去る能わず、後に赦を去る能わず)去る能わずと為せば、曷^{なん}ぞ一赦して而して遂に定まるの若かん乎！赦して而して從わざれば、誅するも未だ晚^{おそ}からざる也。」

嗣は之に従う。二月，癸未（1日）朔，將軍の於（（続は于））栗磾を遣わして騎一萬を將して命に従わざる者を討ち、向かう所皆な平らぐ。

【南燕滅亡、劉裕の過酷な仕打ち】

南燕 **〔絶望的籠城戦〕** 南燕の賀頼盧、公孫五樓は地道を為（つく）りて出でて晉兵を撃ち、卻（しりぞ）く能わず。城は久しく閉まり、城中の男女の脚（きやく）（（続は脚））弱を病む者は太半、出でて降る者は相い繼ぐ。超（れん）は輦（れん）して而して城に登り、尚書の悦壽は超を説いて曰く、

「今日は寇を助けて虐を為し、戰士は調瘁し、獨り窮城を守り、外援に絶望し、天の時人の事は亦た知る可きなり矣。苟しくも歴數には終わり有れば、堯、舜も位を避ける、陛下は豈に變通之計を思わざるべけんや乎！」

超は歎じて曰く、

「廢興は、命也。吾は寧ろ劍を奮つて而して死すとも、壁を銜（か）みて（（降伏して生きる））而して生きる能わず！」

■ **〔廣固は陥落し、南燕は滅亡〕** 丁亥（5日）、劉裕は衆を悉くして城を攻める。或は曰く、

「今日は往亡（曆書に二月驚蟄の後14日を往亡日とする）なり、師行きて利あらず。」

裕は曰く、

「我は往きて彼は亡びる、何の不利為るや！」

四面より急に之を攻める。悦壽は門を開き晉の師を納れ、超は左右數十騎と城を逾えて圍を突いて出でて走り、追いて之を獲る。裕は降らざる之罪を以て數め、超は神色自若なり、一に言う所無く、惟だ母を以て劉敬宣に托し而して已む。裕は廣固が久しく下らざるを忿り、盡く之を坑し、妻女を以て將士に賞せんと欲す。韓范は諫めて曰く、

「晉室は南遷し、中原の鼎は沸い、士民は援無く、強ければ則ち之に付き、既に君臣と為れば、必ず須らく之れが為に力を盡くす。彼は皆な衣冠の舊族、先帝の遺民なり。今王師は吊（ちよう）（（続は弔））伐（（民を弔い罪を伐つ））して而して盡く之を坑にすれば、安所に歸せ使めん乎！竊に西北之人の復た來蘇之望み無しを恐れる矣。」（7-118p）

裕は容を改めて之を謝す、然れども猶ほ王公以下三千人を斬り、家口萬餘を没入し、其の城隍を夷らげ、超を送りて建康に詣らしめ、之を斬る。（隆安二年慕容徳が南燕を建てて二主13年に滅ぶ）

★ **〔劉裕の残酷な仕打ちでは、天下統一はできない〕** 臣光は曰く、

「晉の江を濟るより以來、威靈は競わず、戎狄は横騫（おうご）（（欲しいままに駆け巡る））し、中原を虎噬（こぜい）す。劉裕は始めて王師を勸（（続は以））めて東夏を剪平し、此の際に於いて賢俊を旌禮し、疲れた民を慰撫し、宣しく愷悌之風をし、殘穢之政（すす）を滌ぎ、群士をして風に向い、遺黎して踵を企て使めず。而して更に恣（ほしいまま）に屠戮を行ひ以て忿心を快くする。其の施設の跡は、苻、姚之如かずに曾して、其の四海を蕩壹し、成美大之業を成す能わざりしは宜（むべ）なるかな、豈に智勇有りと雖も、而して仁義無く之をして然ら使めんに非ざる哉！」

【盧循は建康に逼る危機】

■ **〔盧循の建康奪取計画〕** 初め、徐道覆は劉裕の北伐を聞き、盧循に盧に乗りて建康を襲うを勧め、循は従わず。道覆は自ら番禺（（広東省粵海道番禺県、現・広州市番禺区））に至り循を説いて曰く、

「本嶺外（（交廣の地は五嶺の外））に住むは、豈に理は此に極まるを以て、之を子孫に傳えん邪？正に劉裕が與

に敵と為し難きを以ての故也。今裕は兵を堅城之下に頓し、未だ還る期有らず、我は此の歸るを思う死士（孫泰の徒党は三呉の人、孫恩の掠めるも三呉の人。久しく海中にあり皆郷土に歸るを思う）を以て何、劉之徒（何無忌・劉毅）を掩撃せんこと、掌を反す如き耳。此の機に乗らざるにして、而して苟くも一日之安を求め、朝廷は常に以て君が腹心之疾と為す。若し裕が齊を平らぐる之後、甲を息めること歳餘にして、璽書を以て君を征（統は徵）し、裕は自ら將いて豫章に屯し、諸將を遣わして銳師を帥いて嶺を過ぎれば、復た將軍之神武を以てすると雖も、恐らくは必ず當る能わざる也。今日之機は、萬に失う可からず。若し先ず建康に克ち、其の根蒂を傾けるべし。裕は南に還ると雖も、為す能わざる也。君若し同ぜずんば、便ち當に始興之衆（元興三年循は始興を攻めて徐道覆に守らせる）を帥いて直ちに尋陽を指すべし。」

循は甚だ此の舉を樂しまず、而して以て其の計を奪う無く、乃ち之に従う。

■ 「盧循の挙兵と劉裕の帰還」 初め、道覆は人をして船材を南康山（江西省贛南道の山、現・贛州市南康区）に伐ら使め、始興（南康より四百里、広東省嶺南道始興県の西北、現・韶關市始興県と清遠市）に至り、之を賤賣し、居人は争いて之を市し、船材は大いに積みて而して人は疑わず、是に至り、悉く取りて以て艦を裝い、旬日に而して辨ず。循は始興より長沙を寇し、道覆は南康、廬陵（江西省武陵道安福県、現・吉安市）、豫章（江西省潯陽道湖口県など、現・九江市湖口県彭澤県等）を寇し、諸の守相は皆な任を委てて奔走す。道覆は流れに順いて（贛石の流れに順う）而して下り、舟械は甚だ盛んなり。

■ 「劉裕は盧循の反乱を知らず」 時に燕に克つ之間（聞、報）未だ至らず、朝廷は急に劉裕を征（統は徵）す。裕は方に留りて下邳に鎮し、司、雍を經營せんと議し、詔書を得るに會して、乃ち韓范を以て都督八郡（青州は旧の齊・濟南・樂安・城陽・東來・長廣・平昌・高密の八郡）軍事、燕郡太守（南燕は廣固に燕郡尹を置くので太守を置く）と為し、封融を勃海太守と為し、檀韶を琅邪太守と為し、戊申（26日）、兵を引いて還る。韶は、祗之兄也。之久しく、劉穆之は范、融（燕の旧臣の反を恐れる）の反を謀ると稱して、(7-119p)皆な之を殺す。

■ 「尋陽の何無忌は盧循の迎撃に失敗して戦死」 安成の忠肅公の何無忌は尋陽より兵を引いて盧循を拒む。長史の鄧潛之は諫めて曰く、

「國家の安危は、此の一舉に在り。循の兵艦は大いに盛んと聞く。勢いは上流に居り、宜しく南塘（江西省潯陽道の贛江の堤、現・上饒市余干県）を決し、二城を守り以て之を待てば、彼は必ず敢えて我を捨てて遠く下らず。力を蓄え鋭を養い、其の疲老を俟ちて、然る後に之を撃てば、此れ萬全之策也。今成敗を一戦に決し、萬一にも利を失なわば、悔いて將に及ぶ無し！」

參軍の殷闡は曰く、

「循の將いる所之衆は皆な三呉の舊賊にして、百戦に餘勇なり、始興の溪子（徐道覆配下の兵）は、拳捷（力強く敏捷）にして善く鬥い、未だ輕んじ易からず也。將軍は宜しく留まりて豫章に屯し、兵を屬城に徵し、兵至りて合戦するとも、未だ晚しと為さざる也。若し此の衆を以て輕々しく進めば、殆ど必ず悔い有らん。」

無忌は聽かず。三月，壬申（20日）、徐道覆と豫章に遇い、賊は強弩數百をして西岸の小山に登り之を邀え射た令む。會 西風は暴急し、無忌の乗る所の小艦は飄いて東岸に向かい、賊は風に乗りて大艦を以て之に逼り、衆は遂に奔潰す。無忌は厲聲して曰く、

「我が蘇武の節を取り來たれ！」

節は至り、執りて以て戦いを督す。賊衆は雲集し、無忌は色を辭して撓む無く、節を握りて而して死す。是に於いて中外は震駭し、朝議は乘輿を奉じて北走して劉裕に就かんと欲す。既に而して賊は未だ至らずを知り、乃ち止む。

西秦 西秦王の**乾歸**は秦の金城郡を攻めて、之を抜く。

夏 **〔夏の後秦圧迫〕** 夏王の**勃勃**は尚書の**胡金纂**を遣わして平涼を攻める。秦王の**興**は平涼を救い、**金纂**を撃ち、之を殺す。**勃勃**は又た兄の子の左將軍の**羅提**を遣わして攻めて定陽（陝西省榆林道宜川縣、現・延安市宜川縣）を抜き、將士四千餘人を**坑**^{いきうめ}にす。秦の將の**曹熾**、**曹雲**、**王肆佛**等は各々數千を將して内に徙り、**興**は之を湟山及び陳倉（陝西省關中道宝鸡縣の東、現・宝鸡市陳倉區）に處く。**勃勃**は隴右を寇し、白崖堡を破り、遂に清水（甘肅省渭川道清水縣、略陽郡に属す、現・天水市清水縣）に趣き、略陽太守の**姚壽都**は城を棄てて走り、**勃勃**は其の民の萬六千戸を大城に徙す。**興**は安定より之を迫り、壽渠川に至り、及ばず而して還る。

南涼 **〔僊檀は沮渠蒙遜に逼られ、わずかに逃れて樂都に遷都〕** 初め、南涼王の**僊檀**は左將軍の枯木等を遣わして**沮渠蒙遜**を伐ち、臨松（甘肅省甘涼道張掖縣、現・張掖市肅南ユグル族自治縣）の千餘戸を掠めて而して還る。**蒙遜**は南涼を伐ち、顯美（甘肅省甘涼道武威縣、現・武威市）に至り、數千戸を徙して而して去る。南涼太尉の**俱延**は復た**蒙遜**を伐ち、大敗して而して歸る。是の月、**僊檀**は自ら五萬騎を將して**蒙遜**を伐ち、窮泉（甘肅省甘涼道山丹縣、現・張掖市山丹縣）に於いて戦い、**僊檀**は大敗し、單馬にして奔り還る。**蒙遜**は勝ちに乗りて進みて姑臧を圍む。姑臧人は**王鐘**之誅（前卷四年にあり）に懲り、皆な驚きて潰え、夷、夏の萬餘戸は**蒙遜**に降る。**僊檀**は懼れ、司隸校尉の**敬歸**及び子の**佗**を遣わして**蒙遜**の質と為し以て和を請い、**蒙遜**は之を許す。**歸**は胡坑（甘肅省甘涼道武威縣、現・武威市）に至り、逃げ還り、(7-120p) **佗**は追兵の執る所と為り、**蒙遜**は其の衆八千餘戸を徙して而して去る。右衛將軍の**折掘奇鎮**は石驢山（甘肅省甘涼道武威縣、現・武威市）に據りて以て叛す。**僊檀**は**蒙孫**之逼るを畏れ、且つ嶺南の**奇鎮**の據る所と為るを懼れ、乃ち樂都に遷り、大司農の成公の**緒**を留めて姑臧を守らしむ。**僊檀**は才^{わずか}（続は纔）にして城を出、魏安人の**侯謚**等らは閉門して亂を作し、三千餘家を收合して、南城に據り、**焦朗**を推して大都督、龍驤大將軍と為し、**謚**は自ら涼州刺史と稱し、**蒙遜**に降る。

【劉裕の反転急速に盧循驚愕】

■ **〔劉裕は天命を信じて江を渡る〕** 劉裕は下邳に至り、船を以て輜重を載せ、自ら精銳を帥いて歩して歸る。山陽に至り、**何無忌**の敗死を聞き、京邑の守りを失うを慮りて、甲を卷いて兼行し、數十人と與に江上（南史に江上、淮上は既に山陽を過ぎたから、江上が正しい）に至り、行人に問うに朝廷の消息を以てし、行人は曰く、

「賊は尚ほ未だ至らず、**劉公**若し還れば、便ち憂うる所無し。」

裕は大いに喜ぶ。將に江を濟らんとし、風は急にして、衆は鹹^{みな}な之を難しとす。**裕**は曰く、

「若し天命國を助ければ、風は當に自ずから息まん。若し其の然らずんば、覆溺するとも何ぞ害せん！」即ち舟に登るを命じ、舟に移りて而して風は止む。江を過ぎ、京口に至り、衆は乃ち大いに安ず。**夏**、**四月**、癸未（2日）、**裕**は建康に至る。江州の覆没するを以て、表して章綬を送り、詔して許さず。

■ **〔盧循迎撃への議論〕** 青州刺史（青兗并三州はみな僞郡で江淮間にあり）の**諸葛長民**、兗州刺史の**劉籓**、并州刺史の**劉道憐**は各々兵を將いて入りて建康を衛る。**籓**は、兗州刺史の**毅**之從弟也。**毅**は**盧循**之寇を聞き、將に之を拒まんとし、而るに疾と作^なる。既に^い謬え、將に行かんとす。**劉裕**は**毅**に書^やを遣りて曰く、

「吾は往に妖賊（孫泰・孫恩・盧循はみな左道で衆を惑わす）を撃つに習い、其の變態^{へん}を曉^{さと}る。賊は新たに奸利を獲、其の鋒は輕んず可からず。今船を修め畢^{おわ}るに垂々とし、當に弟と與に同じく擧げるべし。克ち平らげる之日は、上流之任は、皆な以て相い委ねん。」

又た劉藩を遣わして往きて諭して之を止める。毅は怒り、藩に謂って曰く、

「往^きに一時之功を以て相い推す耳、汝は便ち我は真^{まこと}に劉裕に及ばずと謂う邪！」

書を地に投げ、舟師二萬を帥いて姑孰（劉裕は豫州刺史として鎮す）を發す。

■ 【劉毅は桑落洲にて盧循に大敗す】 循之初めて入寇する也、徐道覆をして尋陽に向かわしめ、循は自ら將いて湘中（漢の長沙・零桂の地）の諸郡を攻める。荊州刺史の劉道規は軍を遣わして逆え戦い、長沙に於いて敗る。循は進みて巴陵（湖南省武陵道岳陽縣、現・岳陽市岳陽縣）に至り、將に江陵に向かわんとする。徐道覆は毅の將に至らんとするを聞き、馳せて循に報じ使めて曰く、

「毅の兵は甚だ盛んなり、成敗之事は、之を此に系け、宜しく力を並せて之を摧^{あわ}くべし。若し此に克捷すれば、江陵は憂うるに足らざる也。」

循は即日巴陵を發し、道覆と兵を合わせて而して下る。五月、戊午（7日）、毅は循と桑落洲（江蘇省尋陽道九江縣、現・九江市柴桑區）に戦い、毅の兵は大敗し、船を棄て、數百人を以て歩走し、餘衆は皆な循の虜する所と為り、棄てる所の輜重は山積す。

■ 【盧循は道覆の意見に従い建康に向かう】 初め、循は尋陽に至り、裕の已に還るを聞き、猶ほ信じず。既に毅を破り、乃ち審問（詳細な報告）を得、其の黨と相い視て色を失う。循は退きて尋陽に還り、攻めて江陵を取り、(7-121p)二州（荊州・江州）に據り以て朝廷に抗さんと欲す。道覆は、

「宜しく勝ちに乗りて徑^{たぐ}ちに進むべし」

を謂い、固く之を爭う。循は猶豫して累日、乃ち之に従う。

■ 【兵力不足の劉裕の作戦】 己未（8日）、大赦す。裕は人を募りて兵と為し、之を賞して京口（劉裕の根拠地、桓玄討伐の報償は大きかった）にて義に赴く之科と同じくす。民を發して石頭城に治む。議者は謂う、

「宜しく兵を分けて諸々の津要を守るべし」

と、裕は曰く、

「賊は衆く我は寡なし、若し兵を分けて屯守すれば、則ち人の虚實を測らん。且つ一處に利を失えば、則ち三軍之心を沮まん。今衆を石頭^{あつ}に聚め、宜しきに隨いて應じて赴けば、既に彼をして以て多少を測る無から令め、又た衆力に於いて分かれず。若し徒旅轉^{うた}た集まれば、徐^{おもむ}ろに更に之を論じる耳。」

■ 【孟昶らの朝廷避難論を劉裕は退ける】 朝廷は劉毅の敗れるを聞き、人情は恟懼す。時に北師は始めて還り、將士は多く創病となり、建康の戰士は數千に盈たず。循は既に二鎮に克ち、戰士は十餘萬、舟車は百里絶えず、樓船の高さは十二丈、敗れて還る者は争いて其の強盛を言う。孟昶、諸葛長民は乘輿を奉じて江を過ぎんと欲し、裕は聽さず（時に江西にも江北にも頼る城池無し）。初め、何無忌、劉毅之南を討つ也、昶は其の必ず敗れんことを策し、已に而して果たして然り。是に至り、又た、

「裕は必ず循に抗す能わず」

と謂い、衆は頗る之を信じる。惟だ龍驤將軍の東海の虞丘進は昶等に廷折（身を挺して君主の面前で議論する、進は進みてもか）して、以て然らずと為す。中兵參軍の王仲德は裕に言つて曰く、

「明公は命世の作輔、新たに大功（南燕を滅ぼす）を建て、威は六合に震う。妖賊は虚に乗りて入寇し、既に凱還（凱旋帰還）を聞き、自ら當に奔潰せん。若し先に自ら遁逃すれば、則ち勢いは匹夫に同じく、匹夫の號令は、何を以て物を威^{おど}さん！此の謀（遁逃）が若し立てば、請う此れより辭さん。」

裕は甚だ悦ぶ。昶は固く請いて已まず、裕は曰く、

「今重鎮は外に傾き、強寇は内に逼り、人情は危駭し、固き志有るもの莫し。若し一旦遷動すれば、便ち自ら土崩れ瓦解し、江北も亦た豈に至るを得る可けんや！設令至るを得るも、日月を延ばすに過ぎざる

耳。今兵士は少しと雖も、自ら一戦に足る。若し其の克ち済すれば、則ち臣主は休を同じくす。苟しも厄運は必らず至れば、我は當に廟門に屍を横たえ、其の由來は身を以て國を許すの之志を遂げるべし、草間に竄伏し苟くも存活を求める能わざる也。我が計は決す矣、卿は復た言う勿かれ！」

昶は其の言の行われざるを恚り、且つ必ず敗れると為るを以て、因りて死を請う。裕は怒りて曰く、「卿は且く申ねて一戦せよ、死すること復た何ぞ晩からん！」

昶は裕が終に其の言を用いざるを知り、乃ち抗表して自ら陳じて曰く、

「臣裕が北討するや、衆は並んで同ぜず、唯だ臣のみ裕の計を行うを賛し、強賊をして間に乗じ、社稷を危逼なら使むるを致すは、臣之罪也。謹しんで咎を引いて以て天下に謝す！」

表を封じて畢わり、藥を仰いで而して死す。

■ **〔劉裕の迎撃態勢〕** 乙丑（14日）、盧循は淮口（秦淮の江に入る口）に至り、中外は戒嚴す。（7-122p）琅邪王の徳文は宮城諸軍事を都督し、中堂皇（堂に四壁無きを皇という）に屯し、劉裕は石頭に屯し、諸將は各々屯守有り。裕の子の義隆は始めて四歳（年）、裕は咨議參軍の劉粹をして之を輔けて、京口に鎮ぜ使む。粹は、毅之族弟也。

■ **〔民の反応に劉裕は当惑〕** 裕は民の水に臨みて賊を望むを見、之を怪しみ、以て參軍の張劭に問う、劭は曰く、

「若し節鉞（劉裕の軍、節と鉞を与えられている）未だ反せざれば、民は奔散之暇あらず、亦た何ぞ能く觀望せんや？今當に復た恐れる無かるべき耳。」

裕は將左に謂って曰く、

「賊が若し新亭より直進すれば、其の鋒は當たる可からず、宜しく且く回避すべし、勝負之事は未だ量る可からざる也。若し西岸（蔡洲）に廻泊すれば、此くは禽と成らん耳。」

■ **〔徐道覆は盧循の決断力に不安を抱く〕** 徐道覆は新亭より白石に至り舟を焚きて而して上り、數道より裕を攻めんと請う。循は萬全を以て計を為さんと欲し、道覆に謂って曰く、

「大軍は未だ至らず、孟昶は便ち風を望んで自裁す。大勢を以て之を言え、自ら當に日を計りて潰亂すべし。今勝負を一朝に決し、乾沒（あらかじめ物を貯え、時を待ちて利を得るを乾、失うを沒）して利を求め、既に必ず克つ之道に非ず、且つ士卒を殺傷し、兵を按じて之を待つに如かず。」

道覆は循が疑い多く決するに少なきを以て、乃ち歎じて曰く、

「我は終に盧公の誤まる所と為る、事は必ず成る無からん。我をして英雄の為に驅馳するを得使めば、天下は定まるに足らざる也。」

■ **〔盧循の進軍鈍化よ劉裕は喜ぶ〕** 裕は石頭城に登り循の軍を望み、初め引きて新亭に向かうを見、左右を顧みて色を失う。既に而して蔡洲（石頭の西岸、江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区）に廻泊し、乃ち悦ぶ。是に於いて衆軍は轉た集まる。裕は循が侵軼せんを恐れ、虞丘進の計を用い、樹を伐りて石頭の淮口に柵し、越城を修治し、查浦、藥園、廷尉の三壘（江の南岸、淮口にあり）を築き、皆な兵を以て之を守る。

■ **〔劉毅の帰還〕** 劉毅は蠻、晉（西陽の上下羣蠻の居る地を蠻、その晉の民になり徴税課役するを晉）を経渉し、僅かに能く自ら免れ、従者は饑え疲れ、死亡は什に七八。丙寅（15日）、建康に至り、罪を待つ。裕は之を慰勉し、中外留事に知たら使む。毅は自ら貶するを乞い、詔して降して後將軍と為す。

● 魏の長孫嵩は漠北に至り而して還り、柔然は追いて之を牛川（山西省雁門道左雲県、現・大同市左雲県？ウランチャブ市興和県？）に圍む。壬申（21日）、魏主の嗣は北に柔然を撃つ。柔然可汗の社命は之を聞き、遁走し、

道に死す。其の子の**度拔**は尚ほ幼なく、部衆は**社命**の弟の**斛律**を立て、**藹苦蓋可汗**（続は藹豆蓋可汗）と號す。**嗣**は兵を引いて參合陂に還る。

■ **〔劉裕は石頭守備作戰に徹する〕****盧循**は兵を南岸（秦淮河の南岸）に伏し、老弱をして舟に乗りて白石に向かわせめ、聲言す、

「衆を悉くして白石より歩いて上る。」

劉裕は參軍の**沈林子**、**徐赤特**を留めて南岸に戍し、查浦を斷たしめ、戒めて今堅く守りて動く勿かれと。**裕**及び**劉毅**、**諸葛長民**は北に出でて之を拒む。**林子**は曰く、

「妖賊の此の言は、未だ必ずしも實に有らず、宜しく深く之が防ぎを為すべし。」

裕は曰く、

「石頭は城險にして、且つ淮の柵は甚だ固く、卿を留めて後に在らしめば、**(7-123p)**以て之を守るに足らん。」

林子は、**穆夫**（吳興武康の人、孫恩の乱で殺される）之子也。

■ **〔盧循は秦淮河に押し寄せる〕**庚辰（29日）、**盧循**は查浦を焚き、進みて張侯橋に至る。**徐赤特**は將いて之を撃ち、**林子**は曰く、

「賊は白石に往くと聲し而して屢々來たりて挑戦し、其の情は知る可し。吾は衆寡敵せず、險を守りて以て大軍を待つに如かず。」

赤特は従わず。遂に出でて戦い、伏兵は發し、**赤特**は大敗し、單舸にして淮北（秦淮河の北岸）に奔る。**林子**及び將軍の**劉鐘**は柵に據りて力戦し、**朱齡石**は之を救い、賊は乃ち退く。**循**は精兵を引き大いに上りて、丹陽郡（丹陽尹の治所、江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区）に至る。**裕**は諸軍を帥いて馳せて石頭に還り、**徐赤特**を斬り、甲を解く。之久しく、乃ち出でて南塘（秦淮河の南岸）に陳ず。

■ **六月**、**劉裕**を以て太尉、中書監と為し、黃鉞を加える。**裕**は黃鉞を受け、餘は固辭す。車騎中軍司馬の**庾悅**を以て江州刺史と為す。**悅**は、**准**之子也。（劉裕は車騎將軍たりし、劉敬宣が蜀を征して利を失い、乞いて中軍將軍に降格。故に車騎中軍二府、共に一司馬なり）

■ **〔後秦〕**司馬の**國璠**及び弟の**叔璠**、**叔道**は秦に奔る。秦王の**興**は曰く、

「**劉裕**は方に**桓玄**を誅し、晉室を輔け、卿は何為れぞ來たるや？」

對えて曰く、

「**裕**は王室を削弱し、臣の宗族は自ら修立する者有れば、**裕**は輒ち之を除く。方に國患と為り、**桓玄**よりも甚だしからん耳。」

興は**國璠**を以て揚州刺史と為し、**叔道**を交州刺史と為す。

■ **〔盧循建康を攻めきれず〕****盧循**は諸縣を寇掠し得る所無く、**徐道覆**は謂って曰く、

「師は老いたり矣、尋陽に還るに如かず、力を并せて荊州を取り、天下の三分之二に據り、**徐**^{おもむろ}に更に建康と衡を爭う耳。」

秋、**七月**、庚申（10日）、**循**は蔡洲より南に尋陽に還り、其の黨の**范崇民**を留めて五千人を將して南陵（宣城郡宜城県の西、安徽省蕪湖道貴池県、現・池州市貴池区）に據る。甲子（14日）、**裕**は輔國將軍の**王仲德**、廣川太守の**劉鐘**、河間内史の**蘭陵**の**蒯恩**、中軍咨議參軍の**孟懷玉**等をして衆を帥いて**循**を追わせむ。

●乙丑（15日）、魏主の**嗣**は平城に還る。

西秦 **〔西秦乾歸は鮮卑を伐ち苑川に復都〕** 西秦王の**乾歸**は**越質屈機**（鮮卑、曾を叱黎、その子を詰歸=屈機、孝武帝16年に乾歸に降る、21年叛き秦に降る）等の十餘部を討ち、其の衆二萬五千を降し、苑川に徙す。**八月**、**乾歸**は苑川に復都す。

北涼 **〔涼公の暁は朱元虎を金で贖い、蒙遜と結盟〕** **沮渠蒙遜**は西涼を伐ち、西涼の世子の**歆**を馬廟（馬を祀る廟、敦煌にあり）に敗り、其の將の**朱元虎**を禽として而して還る。涼公の**暁**は銀二千斤、金二千兩を以て**元虎**に贖う。**蒙遜**は之を歸し、遂に**暁**と結盟して而して還す。

■ **〔水軍整備で、盧循の巢窟を叩かんとす〕** **劉裕**は（盧循退いて）東府に還り、大いに水軍を治め、建威將軍の會稽の**孫處**、振武將軍の**沈田子**を遣わして衆三千を帥いて海道より番禺を襲わしむ。**田子**は、**林子**之兄也。衆は皆な以て為す、

「海道は艱にして遠く、**(7-124p)**必ず至ることは難しと為す、且つ見力（現在の戦力）を分撤（分配撤去）するは、目前之急に非ず。」

裕は従わず、**處**に敕して曰く、

「大軍十二月之交は必ず妖虜を破り、卿が至る時は、先ず其の巢窟を傾け、彼をして走りて歸する所無から使めん也。」

■ **〔蜀の自立勢力の荊州侵攻、二寇は交わる〕** **譙縱**は侍中の**譙良**等を遣わして秦に入見せしめ、兵を請いて以て晉を伐つ。**縱**は**桓謙**を以て荊州刺史と為し、**譙道福**を梁州刺史と為し、衆二萬を帥いて荊州を寇せしむ。秦王**興**は前將軍の**苟林**を遣わし騎兵を帥いて之に會さしむ。

■ **〔江陵と建康の間を得ず〕** 江陵は**盧循**の東下するより、建康之間を得ず、群盜は互いに起きる。荊州刺史の**劉道規**は司馬の**王鎮之**を遣わして天門（湖南省武陵道石門県治、現・常德市石門県）太守の**檀道濟**、廣武將軍の**彭城の到彦之**を帥いて建康に入援せしむ。**道濟**は、**祗之弟**也。

■ **〔徐道覆は江陵を伐たんとする〕** **鎮之**は尋陽に至り、**苟林**の破る所と為る。**盧循**は之を聞き、**林**を以て南蠻校尉と為し、兵を分けて之に配し、勝ちに乗りて江陵を伐たしめ、

「**徐道覆**は已に建康に克つ」

と聲言す。**桓謙**は道に於いて義舊（桓氏は世々荊楚に居り、旧恩結ぶ人士多し）を召募し、民の之に投じる者は二萬人。**謙**は枝江（湖北省荊南道枝江県、現・宜昌市枝江市）に屯し、**林**は江津に屯し、二寇は交わり逼り、江陵の士民は多く異心を懷く。**道規**は乃ち將士に會して之に告げて曰く、

「**桓謙**は今近道に在り、諸々の長者は頗る去就之計有るを聞き、吾の東來の文武（道規の率いる將士）は以て事を濟すに足る、若し去らんと欲する者は、本より相い禁ぜず。」

因って夜は城門を開き、曉に達して閉じず。衆は鹹な憚り服し、去る者有る莫し。

■ **〔蜀の荊州刺史劉道規は、西の桓謙を撃破〕** 雍州刺史の**魯宗之**は衆數千を帥いて襄陽より江陵に赴く。或は謂う、

「**宗之**の情は未だ測る可からず、

道規は單馬にして之を迎え、**宗之**は感悅す。**道規**は**宗之**をして居り守らしめ、委ねるに腹心を以てし、自ら諸軍を帥いて**謙**を攻める。諸々の將佐は皆な曰く、

「今遠く出でて**謙**を討てば、其の勝つは必し難し。**苟林**は近くの江津に在り、人の動靜を伺い、若し來たりて城を攻めれば、**宗之**は未だ必ず能く固からず。脱し蹉跌有れば、大事は去る矣。」

道規は曰く、

「苟林は愚儒にして、他に奇計無し、吾れ去りて未だ遠からずを以て、必ず敢えて城に向かわず。吾は今謙を取り、往きて至れば便ち克たん。沈疑（呻吟して時間を無駄にする）之間、已に自ら還返せん。謙が敗れば則ち林は膽を破らん。豈に來たるを得るに暇あるや！且つ宗之は獨り守りて、何為れぞ數日を支えざるや！」

乃ち馳せ往きて謙を攻め、水陸は齊しく進む。謙等は大いに舟師を陳ね、兼ねて歩騎を以て、枝江に戦う。檀道濟は先ず進みて陳を陥とし、謙等は大敗す。謙は單舸にて苟林に奔り、道規は追いて之を斬る。還りて、湧口（湧水が江に入る口、湖北省荊南道江陵県、現・荊州市江陵県）に至り、林を討ち、林は走り、道規は咨議參軍の臨淮の劉遵を遣わして衆を帥いて之を追わしむ。初め、謙は枝江に至り、江陵の士民は皆な謙に書を與える。城内の虚實を言い、内應を為さんと欲す。是に至り檢じて之を得、道規は悉く焚きて視ず、(7-125p) 衆は是に於いて大いに安ず。

■【江州刺史の庾悦は盧循の糧道を絶つ】江州刺史の庾悦は鄱陽太守の虞丘進を以て前驅と為し、屢々盧循の兵を破り、進みて豫章に據り、循の糧道を絶つ。九月、劉遵は苟林を巴陵に於いて斬る

■【桓石綏は循に呼応して決起、討伐され、桓氏は壊滅】桓石綏は循が入寇するに因り、兵を洛口（陝西省漢中道洋県、現・漢中市洋県）に起こし、自ら荊州刺史を號し、徼陽（湖南省荊南道建始県、現・恩施トゥチャ族ミャオ族自治州建始県）令の王天恩は自ら梁州刺史を號し、襲いて西城に據る。梁州刺史の傅韶は其の子の魏興太守の弘之を遣わして石綏等を討ち、皆な之を斬る、桓氏は遂に滅びる。韶は、暢之孫也。

西秦 西秦王の乾歸は秦の略陽、南安、隴西の諸郡を攻め、皆な之に克ち、民二萬五千戸を苑川及び枹罕に従す。

●甲寅（5日）、魏主の珪を盛樂（綏遠特別区域歸綏県、現・フフホト市ホリンゴル県）の金陵に葬し、諡して宣武（宋の高祖の永初元年、改めて道武帝とす）と曰い、廟號を烈祖とする。

【劉裕は自身で盧循討伐】

■劉毅は固く盧循を追討するを求め、長史の王誕は密かに劉裕に言つて曰く、「毅は既に喪敗す、復た功を立て使むるは宜しからず。」

裕は之に従う。冬、十月、裕は兗州刺史の劉藩、寧朔將軍の檀韶、冠軍將軍の劉敬宣等を帥いて南に盧循を撃ち、劉毅を以て太尉の留府を監ぜしめ、後事は皆な委ねる焉。癸巳（14日）、裕は建康を發す。

■【劉道規の遊軍が徐道覆を撃破、江陵安心す】徐道覆は衆三萬を帥いて江陵に趣き、破冢（江岸の東、湖北省荊南道石首県、現・荊州市石首市）に奄至す。時に魯宗之は已に襄陽に還り、追いて召すも及ばず、人情は大いに震える。或は、

「循は已に京邑を平らげ、道覆を遣わして來たりて刺史と為す」

と傳えるも、江、漢の士民は劉道規の焚書之恩に感じ、復た貳志無し。道規は劉遵をして別に遊軍を為さしめ、自ら道覆を豫章口に拒み、前驅は利を失う。遵は外より横撃し、大いに之を破り、斬首は萬餘級、水に赴いて死ぬ者は殆ど盡く。道覆は單舸にして走りて湓口に還る。初め、道規は遵をして遊軍と為さしめ、衆は鹹な以て為す、

「強敵が膠（続は前、膠はにかわ、粘り着く）に在り、唯だ衆の少きを患い、應に見力を分割して、無用之地に置くべからず。」

道覆を破るに及びて、卒に遊軍之力を得て、衆心は乃ち服す。

西秦鮮卑の僕渾、羌句豈、輪報、鄧若等は戸二萬を帥いて西秦に降る。

■ **「范崇民の水軍の瓦解」**王仲德等は劉裕の大軍が且に至らんとするを聞き、進みて范崇民を南陵に攻め、崇民の戦艦は夾みて兩岸（続は西岸、文意からは兩岸が正しい）に屯す。**十一月**、劉鐘は自ら行きて賊を覘い、天は霧して、賊は鉤して其の舸を得る。鐘は因りて左右を帥いて艦戸（舟人はこれを馬門という、船室に入る口、かなり大きい艦）を攻め、賊は遽に戸を閉めて之を拒む。鐘は乃ち徐ろに還り、仲德と共に崇民を攻め、崇民は走る。

■ 癸丑（5日）、益州刺史の鮑陋は卒す。譙道福は巴東を陥とし、守將の溫祚（もと巴東の太守）は、時延祖（劉敬宣の黃虎の退去より、巴東に屯す）を殺す。

■ **「盧循の根拠地の廣州を落とす」**盧循の兵の廣州を守る者は海道を以て「虞」と為さず。庚戌（2日）、孫處は海に乗りて奄至し、大霧に會し、四面から之を攻め、即日其の城を抜く。外に其の舊民を撫し、循の親黨を戮し、**（7-126p）**兵を勒して謹しんで守り、沈田子等を分遣して嶺表の諸郡を撃たしむ。

■ **「劉裕は大雷にて盧循の水軍を撃破」**劉裕は雷池（安徽省安慶道望江県、現・安慶市望江県）に軍す、盧循は聲を揚げ、

「雷池を攻めず、當に流れに乗りて徑に下らん。」

裕は其の戦いを欲するを知り、**十二月**、己卯（1日）、大雷（安徽省安慶道望江県、現・安慶市望江県）に進軍す。庚辰（2日）、盧循、徐道覆は衆數萬を帥いて江を塞いで而して下り、前後は舳艫之際を見る莫し。裕は悉く輕艦を出し、衆軍を帥いて力を齊せて之を撃つ。又た歩騎を分けて西岸に屯せしめ、先ず火具を備えしむ。裕は勁弩を以て循の軍を射る。風水の勢いに因りて、以て之に蹙る。循の艦、悉く西岸に泊す。岸上の軍は火を投げて之を焚き、煙炎は天に漲る。循の兵は大敗し、走りて尋陽に還る。將に豫章に趣かんとす。乃ち力を悉くして左裡（江西省潯陽道都昌県、現・九江市都昌県、章江の左にある）を柵斷す。丙申（18日）、裕の軍は左裡に至り、進むを得ず。裕は兵を麾いて將に戦わんとし、執る所の麾の竿が折れ、幡は水に沈み、衆は並んで怪しみ懼れる。裕は笑いて曰く、

「往年の覆舟之戦（桓玄を討ち桓謙と戦う時）に、幡竿は亦た折れ、今者復た然り、賊は必ず破れん矣。」

即ち柵を攻めて而して進み。循の兵は殊に死戦すと雖も、禁ずる能う弗し。循は單舸にして走り、殺す所及び水に投げて死する者は凡そ萬餘人。其の降附を納め、其の逼略を宥し、劉藩、孟懷玉の輕軍を遣わして之を追わしむ。循は散卒を収め、尚ほ數千人有り、逕ちに番禺に還る。道覆は走りて始興を保つ。裕は建威將軍の褚裕之を板じて廣州刺史を行わしむ。裕之は、袁（崇徳太后の父）之曾孫也。裕は建康に還る。劉毅は劉穆之を惡み、毎に従容として裕と言う、

「穆之の權は太だ重し」、

裕は益々之を親任す。

北燕 **「廣川公の萬泥、上谷公の乳陳の反乱鎮圧」**燕の廣川公の萬泥、上谷公の乳陳は、自ら宗室に、大功（慕容熙の死する時の功）有りを以て、當に入りて公輔を為さんと謂う。燕王の跋は二藩（馮跋は萬泥を幽州・并州の牧とし肥如に鎮ぜしめ、乳陳を并州・青州の牧として白狼に鎮ぜしむこと）の任重きを以て、久しく而して征（続は徴）す弗し、二人は皆な怨む。是の歲、乳陳は密かに人を遣わして萬泥に告げて曰はく、

「乳陳は謀に至る有り、願はくは叔父と之を圖らん。」

萬泥は遂に白狼に奔り、乳陳と俱に叛し、跋は汲郡公の弘と張興を遣わして歩騎二萬を將して之を討たしむ。弘は先ず遣使して禍福を以て諭す。萬泥は降らんと欲し、乳陳は可からず。興は弘に謂って曰く、

「賊は明日出でて戦わん、今夜は必ず來たりて我が營を驚かさん、宜しく之が備えを為すべし。」
弘は乃ち密かに嚴（続は令）に人ごとに草十束を課し、火を畜えて兵を伏して以て之を待つ。是の夜、乳陳は果たして壯士千餘人を遣わして來たりて營を斫り、衆火俱に起き、伏兵は邀撃し、俘斬して遺す無し。萬泥、乳陳は懼れて而して出で降り、弘は皆な之を斬る。跋は范陽公の素弗を以て大司馬と為し、改めて遼西公に封じる。弘を驃騎大將軍と為し、改めて中山公に封じる。

令和 2 年 8 月 6 日	完訳開始	11770 文字	
令和 2 年 8 月 10 日	完訳終了	23778 文字	
令和 2 年 11 月 22 日	微修正	24116 文字	年表・現代地名対応
令和 3 年 12 月 29 日	書下し終了	25024 文字	